

うきたむ

第27号

2006.5.15

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津 2117 TEL 0238-52-2585
FAX 0238-52-4665



▲ 高島町 日向洞窟 (国指定史跡)

日向洞窟発掘調査五〇周年

考古資料館 館長 佐藤 鎮雄

本館の目玉となる考古資料に、高島町の洞窟遺跡群から出土した石器や土器などがあります。洞窟遺跡のうち日向、一ノ沢、火箱岩、大立の四つは国指定史跡となり、史跡として見学できるように整備されています。本館を訪れる見学者に好評です。他の考古資料館や博物館で、なかなか見られない資料であり、遺跡もすぐ見られるからです。研究者も多数訪れます。

赤土から発見される旧石器文化と黒土から発見される縄文文化の中間の時代、一万二千年前頃の文化の所産であります。日本屈指の洞窟遺跡群から出土した考古資料は、日本列島の歴史を解明する上で今なお重要な歴史遺産です。

これら洞窟遺跡群の中心となるのが日向洞窟で、昭和三〇年に山大柏倉亮吉教授によって調査されたのが最初の学術調査となります。これがきっかけとなって高島町文化財保護会が創設され、その強力な支援のもとに洞窟遺跡の発掘調査が次々と行われ、今日に至ります。保護会の熱心な活動は町あげての歴史公園づくりへ発展し郷土資料館が誕生し、県の施策と相まってうきたむ風土記の丘考古資料館の開館・古の里歴史公園のオープンと展開してきました。

新生高島町スタートの年に始まった日向洞窟の学術調査は、この五〇年間に考古学のみならず多くのものを発展させました。五〇周年の年にあたりその意義を確かめてみた次第です。

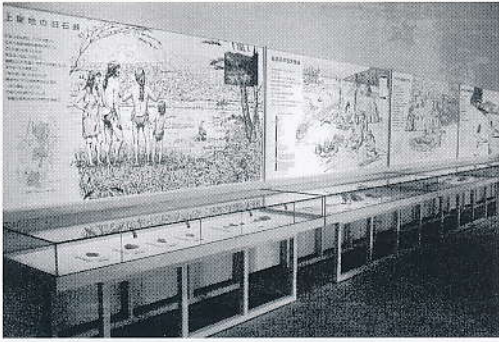
平成二八年度

企画展を柱に

多彩な事業展開

魅力ある資料館に

予算規模からみてもスタッフ人員規模からみても全国で下位の施設ですが、予算規模・スタッフ人員規模の割に入館者数が全国上位にあります。これまでの良さを活かしながら、さらに多くの方にご利用いただけるように魅力ある資料館づくりに力を入れていきます。皆様には、さらなるご支援をお願いします。



▲ 常設展示「旧石器時代パネル」

魅力ある資料館づくりの第一歩は、何といつても利用者の声を反映した館運営と考えます。多くの事業に数多くの声を反映させるようにします。

企画展の充実

今年度の第一四回企画展は「旧石器から日向へー大きく変わった環境と文化ー」をテーマとし、一〇月〜十一月に開催します。旧石器時代から中石器時代(縄文時代草創期)にかけての、やまがたに人が住み着く頃の文化の変化を扱います。

やまがたの旧石器時代の後半(二万数千年前頃〜一万数千年前頃)を彩るナイフ形石器文化・細石刃文化、中石器時代(一万数千年前から一万一千年前)の尖頭器等特色ある石器群と始源土器群の文化を変化をふまえながら展示します。また、この時期は

気候的にみれば氷河期の最寒冷期から後氷期初頭にかけての地球大温暖化の時代で、想像を絶する環境の変化があったときであります。環境の変化と文化の変化を絡ませながら展示します。

この企画展の充実のため、県内および隣県の研究者の方々から展示委員・展示協力委員をお願いし、ご指導をいただきながら知恵を絞って一般入館者の期待に添えるように準備を進めております。

企画展連携のセミナー

数多くの皆様のなじみとつながっている考古学セミナーを、企画展と連携したテーマで実施します。年間を通して充実した研修が行えるように工夫すると共に、企画展を十分に見ることができるようにとのねらいからです。

テーマは「旧石器・中石器時代の考古学」です。七月から八月の日曜日、四回に分けての講座で、講師は県内の専門研究者です。

セミナー連携の講演会

考古学セミナー期間中に、

公開講演会を実施します。セミナーの講座での研修と連動することにより研修の深まり広まりが高まることを期待しています。

講師は東北学院大学の佐川正敏教授で、多くの研究分野で活躍されていますが、旧石器の研究でも有名な方です。近年、日向洞窟等の石器研究に着手されておられます。演題は「日向洞窟の石器が語る環境と文化の大激変ー旧石器から縄文へー」です。企画展のテーマに迫る内容で、日向洞窟調査五〇周年にふさわしいものとなります。

多彩な体験学習

恒例となった古の里歴史公園でのまつりですが、さらに多くの参加者で賑わうように、考古の会員や高島町民有志の実行委員会を立ち上げ、九月に実施します。

うきたむ縄文まつり

例年実施してきた「置賜の発掘調査検討会」を二月に実施します。山形考古学会に共催、県埋文センターに協力をいただき、内容を充実していきます。また、今年から新しく置賜地方の古代史を核とする「うきたむ学講座」を一月から三月にかけて開催し、地域学の研修事業を展開します。

冬季の研修会の充実

本館でこれまで実施してきた好評な体験学習を今年も実施します。五月と十一月に勾玉・弓矢づくり、六月にガラス玉づくり、八月に野焼きのための焼物教室「縄文土器・土笛・土面など」、野焼きは一〇月、九月に拓本とり(土器・石碑)、一月に編布(あんぎん)づくりを行います。いずれも実施日が決まっていますが、学校等の団体は事前予約により随時行います。

【新任者紹介】

これまでお世話になりました館長代理金子貢司・主事高橋博・学芸員竹田純子が転任し、新しく就任しました。

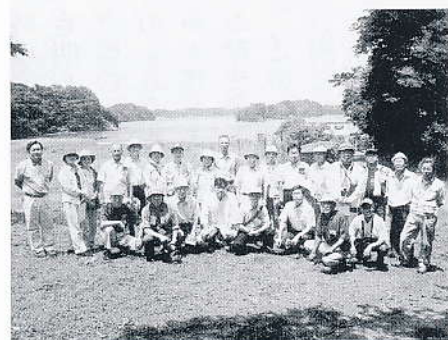
- ◆ 館長代理 井田 秀和
- ◆ 考古資料 佐藤 清浩
- ◆ 主任 五十嵐 研一
- ◆ 学芸員 森谷 幸



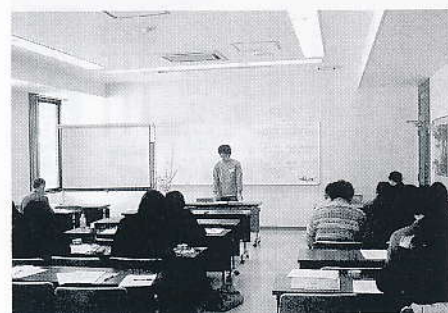
▲遺跡の旅



▲史跡の解説



▲集合写真（宮城県石巻にて）



▲学生フォーラム

楽しく活動しながら学ぶ 「うきたむ考古の会」

＝活動紹介特集＝

本館の入館者の中には、展示その他の事業に数多く参加し、もっと勉強したり、やってみたいという方が少なくありません。そのような方々を中心に出来たのが『うきたむ考古の会』です。会員は約100名にも達しましたが、会のことを知りたいという方も多く、会でも会員をもっと増やしたいという希望がありますので、紹介したいと思います。

いつでも、誰でも考古学や歴史に触れ、その楽しさや面白みを味わおうがモットーで、一〇代から八〇代、ご隠居から専門家まで、いろいろな会員が、「考古・歴史に学び、遊ぶ」を目標に気軽に活動中です。

県内外の遺跡をめぐる

「うわっ、石垣だ!」、「あつ、古墳!」。見慣れたこの山、

あの丘に、地域の大切な歴史がそとに残されています。ガヤガヤ、ザワザワと見学会、宿泊の時もあれば、日帰り、そして半日の散歩の時もあります。昨年度は、宮城県石巻や神奈川県鎌倉に宿泊、宮城県川崎町や村山市・東根市に日帰りで行きました。

情報をいち早く!

年一回発行の会誌『うきたむ考古』と隔月発行の『うきたむ考古通信』で、会員の交流と情報交換を行っています。

「次の遺跡めぐりは?」、「最近どんな展示会があるのかな?」、「勉強会に出てみようかな?」、「考古資料館の事業案内に加えて県内のそのような情報が満載になります。『あの遺跡の説明会はいつだろう?』、「うちの近所に遺跡はあるの?」、そのような情報交換も行っています。

互いに学び、歴史・文化を守る

もちろん、勉強「も」します。ほぼ毎月の「おしゃべりの会」では、話題提供をもとにお茶を飲みながら楽しく学びあっています。

ています。

また、昨年度は南東北の各大学で学ぶ学生の、研究発表をもとに学び合うフォーラムを開催し、交流しました。さらに、様々な見学を通して地域の文化や歴史に関わる遺跡や資料の保存・活用も学び、次世代に「考古・歴史の楽しさ、大切さ」を伝えるお手伝いもしました。

◎今年度の主な予定

- 七月 みる・きく・ふれる 遺跡の旅(男鹿半島 満喫一泊二日)
- 九月 うきたむ縄文祭り
- 五・八・一〇月 歴史散歩
- 一二月 学生フォーラム
- 隔月 おしゃべりの会

入会案内

いつでも気軽に

考古資料館へ

◆会費 二、〇〇〇円

入会資格なしです。

現在の会員は実に多様な方で構成しております。気軽にご連絡下さい。

代表的な平安時代地方豪族の屋敷

古志田東遺跡

米沢盆地の南部、米沢市の市街地の南西に位置する林泉寺地区、その住宅地の中に少し変わった公園があります。平成一年に住宅団地造成に伴い発掘調査が行われた古志田東遺跡を整備した歴史公園です。



▲ 整備された遺跡公園

古志田東遺跡は平安時代の九世紀から一〇世紀にかけての遺跡で、律令制度の崩れの中、登場した地方豪族の屋敷跡とみられています。この時期の東北地方の古代史を解明する上で大事な遺跡であるということで、平成一二年二月九日、国指定史跡に指定されました。

発掘調査の際には、河川跡に面して七棟の掘立柱建物跡や井戸跡が配置されて発見されましたが、その一棟は県内でも最大規模を有します。また、大量の須恵器や赤焼土器とともに木椀・盆・鏡・椀・扇・鉄柄などの木製品が沢山出土し、当時を伺い知る資料となっています。高麗尺・唐尺の物差しは珍しい資料で、これも注目されています。さらに三つの木簡からは、当時の労働力や物資の輸送なども明らかにでき、当時の地方豪族の生産や物流においてどのような役割を果たしていたのかも理解できます。大変貴重な歴史資料といえます。

このようなことから、遺跡公園として整備され、住宅団地を彩っております。河川跡が復元され、中央が広場となつています。西側に駐車場とトイレがあり、駐車場から河川跡に架かる橋を通って広場に行くことができます。広場には、「母屋」の大形建物跡や「工房」とみられる西建物跡が、地表面の柱からとして表示されています。また、「倉庫跡」とみられる北建物跡では、膝丈ほどの高さの柱にして立体感を持たせています。屋敷内の建物跡の配置や大きさを体感できるように工夫してあります。それぞれの建物跡などに説明板があり、分かり易く表示されています。

県内でも雪の多い米沢ですが、新緑の季節からは益々風光明媚な所です。身近な地域の歴史にこのような所もありますので、是非訪れてみて下さい。

我が館の展示品⑩

荒川2遺跡の中世陶磁器

荒川2遺跡は米沢市北部の平野部、塩井町にあり、北に向かつて流れる最上川と鬼面川に挟まれた河間低地の後背湿地の上に立地します。

平成七年と八年に発掘調査が行われ、縄文時代中期末頃の狩猟場の上に奈良・平安時代の集落跡が、その上に室町・安土桃山時代の館跡が重なり合う遺跡であることが確認されました。

1マ展示には保存上の課題があり、後日の企画展に待ちたいと思います。



▲ 荒川2遺跡の中世陶磁

本館では、企画展示室で実施するテーマ展示の充実を図るため、(財)山形埋蔵文化財センターより、荒川2遺跡の中世・近世の陶磁器資料をお借りしました。

荒川2遺跡の室町時代から安土桃山時代にかけての館跡は、当時置賜地方を支配した大名の伊達氏に関わる遺跡で、伊達家の家紋の入った漆椀などの木製品も豊富で、できればより多くの方々に見ていただきたい資料ですが、期間の長いテ

荒川2遺跡の中世陶磁器には国産陶磁器と輸入陶磁器があります。国産陶磁器には瀬戸・美濃や唐津・伊万里など遠くの窯場で焼かれたものと、地元米沢の戸長里窯で焼かれたものがあります。輸入陶磁器には白磁の壺や青磁の椀・水注・染め付けの器などがみられます。いずれも一三世紀から一七世紀にかけてのもので、全て破片資料ですが、これらの陶磁器と対話し、中世のロマンに浸ってみるのはいかがでしょうか。